

一、次の①～⑤の文の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 味にキビしい祖父から料理をほめられるたびに、祖母は満面の笑みを浮かべる。
- ② 母の作る料理もおいしくて、お菓子作りはプロ並みといってもカゴンではない。
- ③ それにひきかえ姉のチョコレートは、カツコウはきれいだが味はいまひとつだ。
- ④ そんな姉のチョコレートでも、父はゼツピンだといって嬉しそうに食べている。
- ⑤ さて僕はといえば、ちよつと目玉焼きを作るのでさえ台所で立ちオウジョウだ。

二、例にならって、次の①～⑤の文の「」にあてはまる言葉をひらがなで答えなさい。ただし、それぞれの言葉は、「」内の数字の字数であり、「」の中にある文字で始まるものとします。

例		
真実だからといって、直接伝えるのは「た	「れる。(4)	(答) ためらわ

- ① あたたかい言葉をかけられ、落ち込んでいた僕は「す 「れる思いがした。(3)
- ② みんなに愛されていたS選手は、多くの人に「お 「れながら引退した。(3)
- ③ しっかりした筆運びに、先生の実直な人柄が「う 「れる。(4)
- ④ つぎはぎだらけの綿入れに、祖母の苦勞が「し 「れた。(3)
- ⑤ 台風の接近で、スポーツ大会の開催が「あ 「れている。(4)

三、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学一年生の「私」にはチエミという身体からだの弱い妹がいて、夏休みらしくない毎日を過ごしていたが、今年もお盆ぼんに親戚しんせきの洗兄せんけいとマリさんが来ると聞いて喜ぶ。マリさんがチエミの相手をしてくれたら、「私」は気兼ねなく、大好きな洗兄と遊ぶことができるからだ。洗兄は、マリさんのことが大好きなチエミと共に、その日を心待ちにしていた。

その日はすぐにやってきて、玄関げんかんのチャイムが鳴った。

「ほれ、一関の家だ」

お茶の準備をしていた赤ちゃんが、私とチエミに言った。イチノセキ、というのは洗兄一家が住んでいる街の名前だった（行ったことはないけど、なかなか遠いらしい）。苗字みょうじがうちと同じ「大原」なので、そう呼んで区別している。

私たちはバタバタと玄関に走り出た。

「こんにちはあ」

ひとまず床ゆかに正座してお辞儀じぎをする。そうするようにしつけられているのだ。一関のおばちゃんが、私たちの顔をのぞき込んでにこしながら「こんにちはあ」と返してくれた。そうつと顔を上げると、洗兄の一家四人がそろって、大きな荷物を持って立っている。それで初めて私は、洗兄に飛びつくことを許されるのだった。

「洗兄っ、待ってた待ってた」

「おう、セン！ また背、伸びたな」

そう言っ笑った洗兄も六年生で、ものすごく上のほうに顔があつた。日焼け顔がにと笑う。私は嬉うれしくて、洗兄の胸の辺り、つまり、手の届く限り上のほうをどこどこ叩たたいた。

「痛いから痛いから」

と言いながら、あまり痛くなさそうに苦笑し、洗兄が靴くつを脱ぬいだ。乾いた泥どろのこびりついたスニーカー、その大きさに私はちよつとびっくりする。

「でっかい！ 何センチ？」

「にじゅじ」

おー、としゃがみ込んで感嘆かたんした私の横に、ふと白い裸足はだしの足が置かれた。足の爪つめがちかちか光るピ

(1-2)

ンクに塗ぬられている。思わず目を留めたら、上からふふつと軽い笑い声が降ってきた。マリさんだった。不自然な足の爪に唾然あざんとしている私を見て、①人さし指を口元にあてて微笑ほほえむ。マリさんはカバンのポケットから、あらかじめ用意してあつたらしい靴下を出して、玄関でそれをはいた。

「マリー。早くしなさい」

おばちゃんの声と呼ぶ。マリさんは「はい」と高い声で答えながら、靴下のかかとをくいと引っぱり上げて派手なピンクの爪を隠かくしきってしまった。大量のおみやげやカバンなどを運んで、一家がばたばたと行き来する中、それはしつかりと「ないこと」にされた。私は「へんなの」としか思わなかったけれど、マリさんの長いスカートの裾すそをにぎりしめたチエミは、おびえたように眉まゆをぐつと寄せていた。

「チエミ？」

私が呼びかけると、②チエミは「ううん」と言ってその顔のまま首を振った。玄関の窓からは、せわしなく蟬せみの声が降りかかっていた。

お茶菓子ちやがしを適当につついたあとで、さっそく私は洗兄と連れ立って家を出た。私の手はしつかりと、洗兄ににぎられている。逆の手には浮き輪うきわがあつた。

洗兄ひとりに私をまかせて海へ行かせるなんて、と両親はいい顔をしなかったけれど、今日はマーちゃんのパパが海についているというのを近所で聞き入ると、まあそれならと浮き輪を出してくれた。洗兄はちゃっかり海水パンツを持ってきていて、それをトイレでズボンの下に仕込しこんだ。

「いやあ、海行きたかったんだよな、ここ来るたび」

学校のほうへ向かう長い直線の舗装道路ほそうだうを歩きながら、洗兄が言った。

「イチノセキには海ないの？」

「ないよ。行こうと思うとすごい遠い。だからここ、うらやましいツスよ」

アスファルトの上には、私たちの影が短く落ちていた。田んぼが続く道の両側が、途中から家の並びに変わり、時々自転車に追い越されたり向こうから来る人とすれ違ちがったりした。③そのたびに私は、人影ひとかげが同級生かどうかしつかり確認した。そうだったら、手を振って合図して、「誰たれその人？」と言わ

せなければならない。「洗兄だよ」と我慢しなければならぬのだ。

そこまで考えてふと、洗兄を見上げて手を引いた。

「ね、洗兄」

私を見下ろす洗兄の顔が、逆光で翳かげる。しかし「ん？」と言った声色はいつも通りやさしい。

(1-3)

「みんなに、洗兄のこと『誰?』って訊かれたら、私何て説明すればいい? 洗兄って、私のなあに?」

私はまだ洗兄と自分との血縁関係をつかめていなかった。「親戚」という認識以外には何もなかったのだ。しかし洗兄はちゃんとわかっていたようで「洗兄は、センのおじさんだ!」と威勢よく答えたものの、「待てよ」と首を傾げた。

「おじさんというのは、父さん母さんのきょうだいのことだから、へんだな。違うな」

とか何とかぶつぶつ言ったあと、いたずらをひらめいたようにニタリと笑ってこちらを見た。

「夏休み限定・兄」だ。そう言っつけ」

「うん!」

あに、と繰り返しながら道を歩いた。十五分くらい歩いて、急カーブを折れると学校に上がる坂道が見える。そこをのぼらないで、横道にそれればすぐ海に出た。

海が見えると洗兄は遠慮がちに「走んね?」と囁いた。私は浮き輪を持った手を「おー」と上げる。サンダルで駆け出す。せいじつばい、よたよた走る私に合わせて、洗兄は隣で、余る歩幅をそのぶんに浮かせ、④ ふーわふーわと走った。

堤防を駆け下りる。サンダルの下でコンクリートがこすれてジャリジャリいう。浜で砂をいじっていたマーちゃんが手を振る。

「センちゃん!」

その声に、海に居るみんなが振り返った。視線が集まる。白い波の端もきらきらしながらこちらへせまってくる。みんなを代表して洗兄を指し「誰?」と訊いたマーちゃんに、私はいよいよ得意気に答えた。

「夏休み限定・あに!」

洗兄はさつそくTシャツを脱いで、「兄でーす」と言った。けどマーちゃんの後ろから、マーちゃんのパパがぬつと現れるなり、「……センのじいちゃんの、末の弟の、子どもです」と訂正した。

午前の海はまだ冷たさがどこに残っていて、時々水を掻いた足指の先に温度差を感じた。心地よい。浮き輪につかまって海に身をまかせていると、洗兄が水中から手を出して私の浮き輪をついたり引いたり、いたずらをしかけた。私はそのたびにキャッキヤと高い声を上げて喜び、洗兄も満足気に笑った。日が高くなるにつれていく。あたためられる海の中を、洗兄は自在に泳ぐ。

(1-4)

私がひと休みしに浜に上がると、マーちゃんが寄ってきて囁いた。

「センちゃんの兄さん、シャチみたいでかつこいいよね」

シャチ! なるほど、日に焼けた身体でしなやかに海の波を切る洗兄は、シャチのようにも見えた。

洗兄は休みもせず、海で泳ぎ続けた。四年生の、塔子ちゃんの兄さんと競争して、いつになくはしゃいでいた。

「おーい、いいかげん帰らせてくれよ。おじさん腹減ったよ」

マーちゃんのパパが、私たちをお願いするようにそう言ったのは一時過ぎだった。私はまたかなり黒くなった。洗兄も「頭ヒリヒリする」と言って、時折短い髪に指を突っ込んだりしていた。

帰りはみんなで群れて歩いた。一番後ろをマーちゃんのパパが守る集団移動の中で、私と洗兄はほぼ真ん中におり、泳ぎ疲れて垂れそうな手を、引き合うようにつないでいた。

家に着くと、既に片付いている食卓に、大きなざるが一つだけのつかっていた。中には少し乾きかけたそうめんの束があった。私と洗兄はとにかくそのそうめんを喉に流し込み、すぐに仏間に寝転がった。力の抜けた手足は、ばたんと畳の上に置くとそのままじんだ。

間もなく洗兄の軽いいびきが聞こえだして、私のまぶたも落ちかける。扇風機のモーター音がする。その向こうにはポロポロとピアノの音色。マリさんが、チエミのために弾いているのだ。前髪を撫でるぬるい風を感じながら、私は静かに眠りに落ちる。

一度、チエミに揺り起こされた気がした。「スイカだ」というばあちゃんの声を聞いた気もした。けれどもまぶたを開くことができない。⑤ 波の残像のような、やわらかな揺れの夢に包まれている。

「セン。起きれ」

まだ寝ぼけたような洗兄の声に起こされた時には、もう夕食のにおいがしていた。ごま油が香る。あ、中華サラダだ、と思うとぼつともやが飛ぶように目が冴えた。身体を起こしたら、すぐ横であぐらをかいた洗兄の頬に、畳のぼこぼこがついていてるのが目に入った。

「洗兄、ほっぺぼこぼこしてるよ」

私が言うと、洗兄はじつと私の顔を見て「お前もぼこぼこしてるって」と言った。いつの間にか窓の外は薄暗く、網戸越しに涼しい風が入り込んできた。古い風鈴が一つ、長い音を立てる。

「洗ちゃん、セン、もう夕ご飯だよ、ほら」

(1-5)

お母さんにうながされて、立ち上がる。一時的に十人家族になった居間には、折りたたみ式のテーブルが出され、いつものがつりしたテーブルと並べられていた。子どもたちは小さいテーブルで食べるのだ。

「私、洗兄の隣！」

「俺も、センのとなり」

気付けばお腹はすっからかんだ。『いただきます』と同時に茶碗にがつつこうとしたら、肝心の箸がない。「はしー」と言うと、大人のテーブルからひよいひよいと何人かの手を渡って箸立てがやってきて、最後に洗兄が「セン、はい」と私の手の中にくれた。そんなちっちゃいことが嬉しい。

私の前で、マリさんにドレッシングのびんを振ってもらっているチエミも、やせているはずの頬をふくふくさせていた。

じいちゃんは一関のおじさんに何やら話しかけ、おじさんは快活に笑いながら、それでも隣にいるウチのお父さんに話題を振ることを忘れない。おじさんにお酒をすすめられたお父さんは、断りきれずに顔を赤くしている。おちよこ一杯の日本酒のおいが、ざわめきにつて時々ここまで香った。

その手前では女三人——ばあちゃん、お母さん、おばさん——が、くちやくちやと何やら話しては高い笑い声を上げている。おばさんは血のつながりがないはずなのに、笑った時の歯の見え方なんかウチのお母さんによく似ていた。

隣には、口の中にもくもくとご飯を入れる洗兄。

「セン、これ食ったらファミコンやろうな」

「うん！」

たくさんの会話が飛び交う。食器のかちやかちゃんて、声の下に隠れてしまつてほとんど聞こえない。⑥ 食卓の周りだけ、何となく暑い気さえる。

私は小さいテーブルの隅にいて、でも確かに大きく包まれていると感じた。この騒がしい食卓の中に、すっぽりと。それはとても心地よかった。

「ね、洗兄、イチノセキの一家とウチと、一緒になればいいと思わない？」

隣に話しかけると、洗兄はご飯茶碗を下ろして、「ん。ほえいい」とやつぱりご飯で頬をふくらませながら箸で私を指した。それで私はますます気を良くした。

が、そこにマリさんの高い笑い声が割って入った。それは会話に夢中な大人たちの気までは引かなかったけれども。

(1-6)

「やあだあ、センちゃん。そんなことあるわけないじゃない」

見ればマリさんは、⑦ ひどいくらいにいつもと同じ、やさしげな顔で笑っていた。その横でチエミが、口元にご飯つぶをくつつけたままぼかんとした。私も、まさか真つ向から否定されるとは思っていなかった。ので、まばたきしかできなかった。隣で洗兄が、明らかにむつとしたのがわかった。

「大人げねえの……」

洗兄のそのつぶやきを、マリさんは聞き逃さなかった。マリさんはわざと強く箸をお椀の上に置いた。ふたりのあいだの空気が張る。

頭がすうつと冷えた。この姉弟の確執など知らなかったものだから、見せつけられてショックだった。けれどもそれより、私の気にかかつていたのは、真正面に座ったチエミのことだった。チエミは涙を抑えるというよりは引込ますように、目も鼻の穴もいっぱいに開いて、肩を小さく震わせていた。それが痛々しくて、⑧ 私は本当にさっきの発言を後悔した。

三日だった。高校生になったマリさんが、この何もない田舎で子守に耐えられたのは。

四日目に、マリさんはお先にとこの家を出ていった。電車で帰ると四回も乗換えがいるらしいのに、それでもひとりで帰った。「夏休みの宿題が間に合わない」という口実ではあったけれど、私はお母さんとばあちゃんが皿洗いをしながらぐちゃぐちゃ言うのを聞いてしまった。

「宿題やんねばなんねような、いい学校でもねえねがなあ」

「見だが、あんの足の爪やー。まっピンクよ」

三日間通っていた海に、私と洗兄は行けなくなった。チエミを連れて、田んぼのあぜ道をぶらぶらした。洗兄はトンボをつかまえて私の耳をかませたり、草相撲に使ういい草の選び方を教えてくれたり、相変わらず面倒見のいい洗兄だったけれど、どこか心ここにあらず、なことが多くなった。私とチエミを遊ばせて、自分は庭の塀の上に腰かけてぼうとする時間もあつた。

そういう洗兄を見つけてしまうと、私は何とか気を引きたくて、「連続コインを取るマリオ」とか「マリオに踏まれるクリボー」とかファミコンネタのものまねを披露した。洗兄は大いにウケて、手を叩いて喜んでくれたけれど、でもそれは何の歯止めにもならなかった。私だつてわかつてはいた。マリさんはきつと二度とここに来ない。そして洗兄も、この先もう何度もしここに来て遊んでくれないのだ。今年を入れて数えても、五本の指が洗兄のために折られることはないだろう。

(1-7)

八日目に私たち——家族全員から、もう仕事の始まった両親を除いた四人——は、イチノセキ一家を道まで出て見送った。ライトバンの後部座席に乗った洗兄は、私とチエミの頭をそれぞれぽんぽんと叩いて、「また来年な」と言つて例のごとく健康的に笑つた。⑨ 私たちは何も言わずにうなずいた。

洗兄とおばちゃんが手を振る、車の窓が遠ざかる。砂利道から出て、学校とは逆のほうへ、長い長い一本道を車は行く。次の集落に入るまで、ずっと車は見えていて、私たちは手を振り続ける。洗兄たちも、私たちが消えるまでえんえん手を振っている。

赤い屋根の家の陰に、車がずっと隠れてしまうと、じいちゃんもばあちゃんもフーツと大きくひと息ついた。「終わつた終わつた」などと腰を伸ばしながら家のほうへ引つ込んでいく。いつもなら私とチエミもすぐそれに続くのだけれど、チエミはうつむいて動かなかつた。私もそこでじつとしていた。

「ねえちゃん」

チエミがふいに顔を上げた。ぎらぎらと濡れた瞳が、まっすぐに私を見た。

「マリちゃん、もう来ないよね」

来ないだろうね、とあやうく返しそうになるのを、ぎりぎりのところで呑み込む。

「わかんないよ。来年になつてみなくちゃわかんないよ」

私は腰をかがめて、チエミの両手をにぎつた。小さな手はとても熱い。

チエミがぼろんと大粒の涙をこぼして、思わずつられそうになるのをこらえた。うつむいたら足元で、

⑩ 蟬の死骸に蟻がたかつていた。蟬は、夏の陽に焼かれきつてしまったかのように乾いていた。

ざつと音が鳴る。風が吹いて、稲の葉を撫でる音だ。大きい風が、チエミの長い髪をばあつと舞わせ、私の半ズボンから出た脚のあいだを通り抜けていく。

気が付いたら夏休みは、あと四日しかなかった。洗兄が来た日から、一行日記が白いままの思い出す。遊び疲れて何も書けなかったのだ。その七行を、小さい文字でつめてつめて十四行くらいにしよう、と思いながら、私は洗兄がしてくれたように、チエミの手をしっかりとにぎり続けていた。

(豊島ミホ『夜の朝顔』による)

※ 問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

(1-8)

問一——線部①に「人さし指を口元にあてて微笑む」とありますが、このときのマリの心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰にも知られたくなかった秘密に気づかれてしまい、滑稽な仕草でごまかそうとしている。
イ チエミの面倒を見てあげる代わりに、足の爪の秘密をしゃべらないでほしいと頼み込んでいる。
ウ 自分が大人っぽいおしゃれをしているという秘密を「私」に見せ、内緒めかして楽しんでいる。
エ 自分の白くてきれいな足に見とれている年下の「私」のことを、いとおしく感じている。
オ 背伸びして大人ぶっている自分の姿を見られた照れくささを、笑って隠そうとしている。

問二——線部②に「チエミは『ううん』と言つてその顔のまま首を振つた」とありますが、このときのチエミの心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大好きなマリさんが秘密にしておいてほしいことは、たとえ姉の「私」にでも明かすわけにはいかないと思つている。
イ マリさんの爪のあまりの派手さに驚いたが、「私」が優しい声をかけてくれたことで、落ち着きを取り戻している。
ウ 高校生のくせに足の爪をピンクに塗つたマリさんが信頼できず、何かひどいことをされるのではないかとおびえている。
エ 心待ちにしていたマリさんに、今までとは違う何かを感じて不安になったが、それを意識しないようにしている。
オ 今まで一度も口止めなどしたことないマリさんから口止めをされたことで、マリさんに対して不信感を抱いている。

(1-9)

問三——線部③に「そのたびに私は、人影が同級生かどうかしつかり確認した」とありますが、それはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一人では行けない海に行くことを同級生に気づいてもらいたかったから。
 イ 洗兄が自分にとって何にあたるのか、詳しく説明して優越感に浸りたいから。
 ウ 一人で海に行くのではなく洗兄と一緒にだと、同級生に教えて安心させたいから。
 エ いつもと違って洗兄と一緒にいるので、同級生と対等に話せると思ったから。
 オ 大好きで頼りがいのある洗兄のことを同級生に見せびらかしたかったから。

問四——線部④に「ふーわふーわと走った」とありますが、このときの洗兄の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 楽しみにしていた日が来て、「私」と一緒に海に向かって走っていることがまるで夢を見ているようで嬉しくなっている。
 イ いつまでたっても海に着かないことにしびれを切らし、「私」をせかして早く海に入りたいと思っている。
 ウ 「私」と一緒に泳ぎたいとはやる気持ちを隠すため、おどけた動作をすることで笑わせようとしている。
 エ 海を前にして一刻も早く泳ぎたい思いながらも、「私」のことも考えて一緒にゆっくり進もうと思っている。
 オ サンドル履きのせいで思うように走ることが出来ないものの、それでも海に近づきたい気持ちでいっぱいになっている。

(1-10)

問五——線部⑤に「波の残像のような、やわらかな揺れの夢に包まれている」とありますが、これはどんな様子を表わしていますか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 思いきり遊んだ疲れと満足感の中で、まだ洗兄たちと海に浮かんでいるかのような幸せな気分になっっている。
 イ マリさんのひくピアノの心地よい音が波音のように感じられ、海での楽しい時間を思い出している。
 ウ いつになく長い間泳いだせいで、スイカを食べる元気もないほど疲れてしまい、夢と現実の区別がつかなくなっている。
 エ あまりにも疲れたせいで、洗兄がたてるさざ波のような軽いびきも気にならず、夢心地でぐっすり眠っている。
 オ 火照った身体をつつみ込むような穏やかな雰囲気の中で、憧れの洗兄と同じ夢を見ている幸せをかみしめている。

問六——線部⑥に「食卓の周りだけ、何となく暑い気さえする」とありますが、このときの様子について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア いつもより多い人数で囲む食卓が、ただでさえ暑い夏の夕方を、ますます過ごしにくいものになっている様子。
 イ 大人も子供も思い思いに盛り上がり、勝手なことを声高にしゃべる人がしだいに多くなって騒がしい様子。
 ウ 全員が一つの家族になったような雰囲気の中で、あちこちで楽しそうなやりとりが続き、活気に満ちあふれている様子。
 エ 久しぶりの再会に興奮し、口うるさい大人のことは忘れて、子どもたちだけで盛り上がっている様子。
 オ 食後の楽しみへの期待がふくらんで、はやる気持ちを抑えきれず、もはや食事をするのもどかしくなっている様子。

(1-11)

問七——線部⑦に「ひどいくらいにいつもと同じ、やさしげな顔で笑っていた」とありますが、このときの「私」の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」と洗兄の話は、マリさんにとっては表情を変える必要もないほどありえないものだと言っているように思えて、衝撃を受けている。
- イ せっかく盛り上がり過ぎていた夏休みの雰囲気、優しいはずのマリさんがたった一言でぶちこわしたと思い、うらめしく思っている。
- ウ 一見優しそうなマリさんの笑顔の裏には、実は田舎に住む「私」たちを見下した気持ちが隠されていると気づいて、嫌悪感を抱いている。
- エ 「私」たちの提案は真剣なものだったのに、マリさんがそれを冗談だと思つてあつさり笑い飛ばしたように思えて、怒りを覚えている。
- オ 思いやりのないことをいつもと同じ笑顔で言うので、今までのマリさんの笑顔も信じられなくなつてしまい、落胆している。

(1-12)

問八——線部⑧に「私は本当にさっきの発言を後悔した」とありますが、それはなぜですか。次のア～オの中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 下手に夢のような話を持ち出して、チエミにむなしい期待を抱かせてしまい、その心の傷を大きくしてしまつたから。
- イ 会話を夢中になつてしまつて洗兄やマリさんの気持ちまで想像することができず、自分勝手な思い込みを口にしてしまつたから。
- ウ 姉弟の仲があまりよくないことを知らなかつたので、つつい調子に乗りすぎてマリさんを怒らせてしまつたから。
- エ 自分たちのたわいない話のせいで、チエミが大好きだつたマリさんがチエミを見捨てて帰ることになつてしまつたから。
- オ 何の気なしに自分が言つた一言によつてマリさんと洗兄の対立を表面化させ、結果としてチエミの心を傷つけてしまつたから。

問九——線部⑨に「私たちは何も言わずにうなずいた」とありますが、このときの「私」の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア イチノセキ一家が残してくれた教訓を胸に、チエミと共に姉妹二人で仲良く生きていくのだという決意を心に秘めている。
- イ マリさんが大人になつて変わつてしまつても、洗兄だけはいつまでも変わらずいてくれるのだと安心してゐる。
- ウ マリさんに続いて洗兄が帰つてしまうことで、今年の夏休みが終わつたことを実感し、名残惜しさに何も言えなくなつてゐる。
- エ 笑っている洗兄の顔は、いつものようにとりあえず調子を合わせてくれるだけだと思い、言葉を失つてゐる。
- オ 今年のようにイチノセキ一家が揃つて来ることはもうないだろうと思いつつも、はかない期待を捨てきれずにゐる。

(1-13)

問十——線部⑩に「蟬の死骸に蟻がたかつていた。蟬は、夏の陽に焼かれきつてしまつたかのように乾いていた」とありますが、この表現にこめられた意味について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア イチノセキ一家がやってきて楽しいものになるはずだつた夏休みが、何一つ思い出も残らない無惨な形で終わつてしまつたことに對するやり場のない怒りとあきらめを象徴している。
- イ 洗兄たちと過ごした夏休みが終わりに近づき、それぞれ少しずつ成長を遂げたことを示すとともに、いつまでも幼い頃のように無邪気に遊べるわけではないという寂しさを表わしている。
- ウ 夏の間はうるさいほど元気だつた蟬が結局死んでしまうように、洗兄やマリさんと過ごしたかけがえない夏も、無意味なものに過ぎなかつたのだということをほのめかしている。
- エ 「私」が大好きだつた洗兄も、チエミがなついていたマリさんも、大人へと成長してゆくなかで、もはや心の潤いをなくし、優しさを失つてしまつてゐることを暗示している。
- オ 大人への階段を上つてゆくマリさんの思いもよらない変化にショックを受けたチエミが、その幼さゆえに身も心も傷ついてしまつたことを、はかない虫の姿にたとえている。

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「風が吹けば桶屋がもうかる」というたとえがありますが、これは一見つながりのない二つの出来事が、関係の連鎖によりつながっていることをさします。この場合には、風↓砂ぼこり↓盲人の増加↓三味線の需要の増加↓ネコの捕獲と減少↓ネズミの増加↓桶の損傷↓桶屋の繁盛、という八つの事象の連鎖です。生態系および、その機能を担う生物群集は「食う―食われる」関係だけでなく、多様な関係をもつ多くの種から構成されていますので、このような事例には事欠きません。ただし、その因果関係を証明することは、そう簡単ではありません。そこで、生物群集のなかで「食う―食われる」関係にある三種の相互作用を明らかにしようとする研究がなされてきました。植物を植食者が食い、植食者を肉食者が食うのですから、A ことになるのではないかと、^①検証すべき仮説ということになります。

北海道の森のなかを流れる河川には、イワナの仲間のオシヨロコマ（エゾイワナ）が生息しています。イワナ同様彼らにとつては、森から降ってくる陸生昆虫が何よりのご馳走なのですが、北海道大学の演習林において、オシヨロコマのすむ川の上空を延々二五メートルにわたって^②ビニールシートで覆ってしまうという実験がおこなわれました。オシヨロコマのご馳走を完全に遮断してしまうというわけです。ビニールシートの効果は抜群で、この区間（抑制区）の陸生昆虫の量は、上空を覆わない区間（自然区）の八分の一程度に抑えられました。ここで陸生昆虫がゼロにならないのは、直接降ってくるだけでも、上流から流れてくるものが多少はあるからです。そしてオシヨロコマのお腹をあけてみると、自然区のオシヨロコマが陸生昆虫を主に食っていたのに対し、シートで覆った区間のオシヨロコマはユスリカやエビのように川底に生息する底生動物を食っていたことが明らかになりました。陸から降ってくる餌がなくなったのですから、これは当然といえば当然です。

^③さて、問題の植物への影響ですが、ここでの^{*}生産者は川底の石に附着している藻類です。抑制区では、オシヨロコマの捕食により藻類を食う底生動物が約六割に減ったのに呼応して、藻類の量は約二倍になりました。

このようにして、オシヨロコマは藻類の味方、つまり敵の敵は味方ということが科学的に証明されました。川面をビニールシートで覆い、サカナを捕まえては胃をあけ、底生動物の^{*}サンプリングをおこない、さらに藻類の量を調べるのがいかに大変かは、想像にあまるものがあります。このように科学的であるというのは大変なことで、ひとつのことを証明するにも多大な時間と労力が費やされます。

(1-14)

鳥を相手に、このような実験をしようとするといかに大変かは十分想像できます。今度は相手が川のなかにいるのではなく、空を自由に飛びまわっているのですから。やはり北海道大学の演習林でその一角を網で完全に囲ってしまい、そのなかの鳥と餌昆虫、そして昆虫の餌の樹木（葉っぱ）の関係を明らかにするという研究がおこなわれました。ここでの捕食者はシジュウカラとゴジュウカラでしたが、シジュウカラを網のなかに入れた結果が「敵の敵は味方」であつたのに対し、^④ゴジュウカラを入れた結果は明瞭なものではありませんでした。

このことについては、両者の食性の違いを説明しておく必要があります。シジュウカラがガやハチの幼虫であるイモムシを主に食うのに対して、ゴジュウカラはイモムシとともに、アリを食います。ところでアリというのは、昆虫のなかでは強力な捕食者として君臨しています。アリとアブラムシの共生、つまりアブラムシがお尻から甘露を出してアリに与える代わりに、アブラムシが天敵のテントウムシから身を守ってもらうという関係が有名ですが、ある種のアリは、実はアブラムシを放牧しているようなもので、普段はアブラムシを護っているが、タンパク質が不足してくるとアブラムシの一部を食料にしてしまうことが知られています。甘露が牛乳、アブラムシの肉が牛肉にあたるというわけで、^⑤アリは牧畜をしているようなものです。

話が少々横道にそれましたが、捕食者がシジュウカラの場合には「鳥は樹木の味方」という図式が素直に成立するのですが、イモムシを食うアリをさらに食ってしまうゴジュウカラの場合には少し複雑な関係が生じることになります。ゴジュウカラは葉っぱを食害するイモムシを食うことにより、樹木を助けますが、この鳥は、これと同時に、イモムシを食って樹木の味方をするアリをも食ってしまうので、樹木の味方なのか敵なのか、よくわからないというわけです。仮にアリスイという、アリを特に好む鳥を網のなかに入れておくと、アリスイがアリを減らし、その結果イモムシが増え、樹木には悪影響が及ぶという、^⑥四者関係「敵の敵の敵は敵」が検証できるに違いないと考えている人もいます。

アメリカでは、岩礁地帯で貝などを捕食するミヤコドリという鳥の除去実験がおこなわれています。ここでは、岩盤の占有をめぐる競争するカメノテやムールガイ、岩盤に生える藻類、そしてこれらを食うカサガイが複数種という非常に複雑な関係が取り扱われています。現象がややこしいので、結果だけ簡単に述べますと、鳥がいなくなると藻類は減少しました。これだけだと「敵の敵は味方」の単純な話にみえますが、実際にはこれに、カメノテとムールガイの競争、さらには三種のカサガイの間の競争が絡んで、鳥の存在がムールガイを利用すること、さらにカサガイ間の競争を緩和していることがわかっています。

(1-15)

このように「風が吹けば桶屋がもうかる」のは、生態系および生物群集にごく普通の現象だと考えてよいと思います。生態学ではこれを「⑦間接効果」と呼んでいます。

(江崎保男『生態系ってなに?』による)

※問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

(注) *1 生産者……ここでは、他の生物を食べずに生きている生物のこと。

*2 サンプリング……全体の傾向をつかむために、一部分をぬぎだすこと。サンプルをとること。

問一——線部①に「検証すべき仮説」とありますが、Aに入る仮説の内容として最もふ

さわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 植物は生態系の中では常に「犠牲者」となる

イ 肉食者は植物を間接的に助けている

ウ 植食者は肉食者と植物に依存して生きている

エ 植物と植食者と肉食者はグー、チョキ、パーの関係である

オ 植食者は肉食者によって食べられている

(1-16)

問二——線部②に「ビニールシートで覆ってしまう」とありますが、それは何のためですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア オシヨロコマや底生動物が移動できないようにビニールシートで覆うことによって、その流域の生物だけによる食生活を観察し、移動しない藻類が受ける影響を確かめるため。

イ ビニールシートの影響で、オシヨロコマが底生動物だけではなく藻類まで食べるようになることによって、底生動物のエサをなくし、底生動物が死滅して藻類が増えるかどうかを確かめるため。

ウ ビニールシートで陸生昆虫をさえぎって、オシヨロコマがもっぱら底生動物だけを食べるようにすることによって、底生動物に食べられるはずの藻類が増えるかどうかを確かめるため。

エ ビニールシートで集めた陸生昆虫をオシヨロコマに食べさせることによって、底生動物や藻類を食べないようにして、藻類や底生動物の受ける影響を確かめるため。

オ オシヨロコマや底生動物をビニールシートで覆ってストレスを与え、オシヨロコマや底生動物の食欲を無くすことによって、陸生昆虫や藻類が増えるかどうかを確かめるため。

(1-17)

問三——線部③に「さて」とありますが、ここでの「さて」の働きを説明した文として最もふさわ

しいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 序論にあたる冒頭部分からの議論がいったん途切れ、話題が大きく転換することを示している。

イ 読者も知っている当然の事実を確認したうえで、筆者の独自の主張が始まることを示している。

ウ 筆者による事実の説明が終わり、ここから読者と一緒に考える部分が始まることを示している。

エ 横道にそれていた議論の流れをいったん断ち切り、もとの流れに話がもどることを示している。

オ 具体的に議論を進めている部分の中で、より重要なことがらの説明が始まることを示している。

問四 — 線部④に「ゴジユウカラを入れた結果は明瞭めいりょうなものではありませんでした」とありますが、なぜそうなったのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 広い範囲を飛び回って捕食するゴジュウカラを使った実験では、どうしても推測に頼る部分が生じてしまうから。

イゴジユウカラはイモムシばかりでなく植物も食べるので、シジユウカラのように單純に善惡が決められないから。

ウ　いくらシジュウカラがイモムシを食べても、ゴジュウカラがアリを食べてしまうため、正確な実験がおこなえないから。

エ　ゴジュウカラはアブラムシと共生しているアリまで食べてしまうため、テントウムシにどのよ
うな影響を与えるか、分からなくなってしまうから。

オゴジユウカラはイモムシを食べるアリまで食べるので、植物を食べるはずのイモムシがそれほど減らないから。

問五——線部⑤に「アリは牧畜ぼくちくをしているようなものです」とありますが、どういふことですか。

その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生命を護まもつてもらう代わりに食料を与あたえ、持ちつ持たれつの関係を作っているということ。

イ 最終的には自分たちが食べるために、栄養を十分に与えて大切に育てているということ。

ウ 危機が迫ると争いになるのは承知の上で、一種の契約的な共生関係を築いているということ。

工 普段^{ふだん}は敵から護つて利用しているのだが、必要なときには食べてしまうこともあるということ。
才 敵から護つてもらうために、自分の命を含めてすべてを任せるといふ信頼^{しんらい}関係があるということ。

才敵から護つてもらふために、自分の命を含めてすべてを任せるといふ信頼関係があるということ。

(1-18)

問六 ――線部⑥に「敵の敵は敵」とありますが、それはどのような関係のことですか。その関係について説明した次の文章の a } c に最もよくあてはまるものを、あとのア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

樹木にとって **a** は直接的な敵である。その **a** にとっては、**b** は無関係のようだが、自分の敵である **c** を食ってくれるのだから **b** は味方である。こう考えると、樹木にとっては、味方である **c** を食べてしまう **b** は敵にあたるということになる。

ア
「シジュウカラ」

イ
「イモムシ」

ウ
「アリ」

エ
「ゴジュウカラ」

オ
「アリスイ」

問七 ― 線部⑦に「間接効果」とありますが、それはどういうことですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

【下書き欄らん】—— 必要ならば使いなさい。

A blank coordinate grid for plotting. The vertical axis (y-axis) is labeled with the number 50. The horizontal axis (x-axis) is labeled with the numbers 60, 40, and 20. The grid consists of dashed lines forming a 10x10 grid of squares. The x-axis has major grid lines every 20 units, and the y-axis has major grid lines every 10 units.

(1-19)

